

あるため、作者が舟中から見ていたとしてよいのではないだろうか。他には、作者が川岸辺りから天門山と舟を見ていたという見方もできる。

李白は、この辺りの情景を見事に詠いこんでおり、大きな世界を展開している。

起句の「天門・中断」、また承句では「向きを変えて流れる長江を」とらえ、結句では「日辺」といった語句を使用し、雄大さを表現している。それに、結句の「孤帆一片日辺より來たる」は「孤帆の遠影碧空に尽き、唯見る長江の天際に流れるを」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（後の参考を参照）の発想と同じで、天空と長江の大きさを表現している。さらに、天空を表す言葉として文字の呼応も見事である。起句の中の「天門」と「開」は縁語の関係になつており、その「天門」の天と結句の「日辺」の日と呼応している。また「碧水」「青山」の青と「孤帆」の白、「日辺」の赤といつた色彩の配置も鮮やかである。

参考

黄鶴樓送孟浩然之廣陵 李白
故人西辭黃鶴樓
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空盡
唯見長江天際流

【備考】

この詩の結句の「日辺」は、晋の明帝の故事に載つているのでそれを紹介する。

幼而聰哲。長安使來。元帝問帝曰、汝謂長安与日孰遠。對曰、長安近。不聞人從日辺來。明日宴群僚。又問。帝曰、日近。元帝曰、何異間者之言。曰、拳頭見日、不見長安。元帝奇之。
(『晋書』・明帝紀)

幼にして聰哲。長安の使い來たる。元帝、帝に聞いて曰く、汝長安と日と孰れか遠しと思ふか」と。対えて曰く、長安近し。人の日辺より來たりしを聞かず」と。明日群僚を宴す。又問う。帝曰く、「日近し」と。元帝曰く、「何ぞ間者に異なるか」と。曰く、「頭を擧ぐれば日を見るも、長安を見ず」と。元帝之を奇とす。

黄鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る
故人西のかた黃鶴樓を辞し
煙火三月揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽き
唯見る長江の天際に流るるを

(晋の明帝は少年の頃より賢かつた。長安から來た使者の前で、父の元帝が、「長安と太陽どちらが遠いか」と尋ね

られた。明帝は「長安の方が近い、それはまだ太陽から来たという人を聞いた事がないから」と答えた。

次の日、群臣と宴を開いているところで、又同じことを聞かれると、明帝は「太陽の方が近い」と答えた。父の元帝は「どうして、前に言ったことと違うのか」と尋ねると、明帝は「頭を上げると太陽は見えるが、長安は見えない」と答えた。元帝はますます人並みではないと思つた。)

【参 考】

①盛唐（玄宗皇帝開元年間西紀713年から肅宗宝応年間
762年に至る約50年間）

この時代、詩界は目ざましい飛躍をして、当時は中国文化歴史上特筆される玄宗皇帝によって統治された。東は朝鮮半島から西は新疆省の外れ、北は蒙古、南は、インドシナ半島まで及んでいた。交易も南方諸国をはじめ、中央アジア・ペルシャ・アラビア・インド・ジャワまで陸路と海路から来朝し、東西文化交流も激しく、国際的にも文化国家中國として大きな地盤の上に立つた。長安の都の繁華は想像するだけに見事なものであつただろう。この文化国家を作り上げた玄宗皇帝も在位40年、晩年は政治に倦き、楊貴妃の妖色に溺れ、太平の夢が破れた。

こうした国情であればこそこの時代の文化に酔う者、又憂國の熱情を吐露する詩人等、輩出してやまないのである。な

かも李白と杜甫の二大詩人の存在は盛唐の詩界に光彩を添えている。

②李白（西紀701—762）

字は太白、名は青蓮居士ともいい、蜀（四川省）の人で、10歳の頃から詩を作り始め、12歳の時、蜀のある県令の家に奉公していたが、ある時山火事が発生した。その時の状況を、その県令は（野火燒山後）・（人帰火不帰）と二句を読んだが、後の句が続かず困っていた。傍にいた李白が直ちに（焰隨紅日遠）・（烟遂暮雲飛）と続けたので、県令は李白の才に驚いたという逸話がある程である。

天宝初年長安に出て、賀知章に認められ、謫仙人（人間離れた詩の仙人）と讃えられた。そして、玄宗へ推薦されたが、生まれつき酒好きと豪放な性格で宮中の生活が合わず、高力士らに憎まれ、追放された。後に安禄山の乱の時、永王側に味方したため、罪に間われて夜郎に流された。最後は、酔い、江上に映る月の影を捉えようとして溺死したともいわれている。

李白の詩は彼の性格を物語るかのような自由奔放で、天才的な鋭さと細やかな落書きのある新鮮味を特色とした絶句が得意である。また、白髮三千丈や長安一片月、等の名文句、そして「峨眉山月の歌」「早に白帝城を発す」「越中懷古」等、人口に膾炙している詩を沢山残している。詩集30巻がある。